

「どうか届きますように」

県立加古川東高等学校長
新谷 浩一

○ この学校を支えているもの

新聞記事等を用いて日々、生徒に新しい気づきを提供してくれる進路指導部通信『COME ON!! COMMON SENSE』。「出したいから、出してるだけやで」坂田先生はそう仰いますが、誰にでもできることではありません。5月にはサッカー日本代表の元主将で、今は北米で活躍する吉田麻也選手についての朝日新聞の記事を引用されていました。加入1年でチームメイトからの信頼を厚め、主将を任されている吉田選手。

地元記者は彼のプレーを評価した上で日頃の振る舞いも絶賛します。そうした周囲の反応を受けての彼の台詞は「プレーだけ、言葉だけでは伝わらない。両方が大事で、そこは自分の強みだと思っている」。

77回生学年通信『啐啄』には体育祭応援団長4人のコメント。緑団の団長の言葉から一部抜粋します。「各団の団長へ。この4人で東高100周年の体育祭ができて本当によかった。四者四様の団が完成し、それぞれの個性が爆発した体育祭だったと思う。ありがとう。僕たち団幹部が最高にこの1ヶ月を楽しめたのは、紛れもなく生徒会と先生方のサポートのおかげです。すばらしい体育祭をありがとうございました」

78回生学年通信『山溜穿石』にはそんな3年生の背中を見つめた2年生に贈られた原田先生からの言葉。「生徒全員がどの競技、どの応援にも全力で取り組んだので、見ていてすべてが楽しかった。閉会式で団幹部が肩を組んで校歌を歌っている姿を見て、彼らの充実感を感じ取ることができた。何事も全力でやるから楽しくなる。適当にやっても面白くはない」



79回生学年通信『前人未踏』には各クラス体育祭委員の感想。3組委員の言葉から一部お借りします。「新しい競技や応援合戦のダンスなど、新しいものを生み出すだけでなく、東高の応援歌や校歌などが百年の伝統として残り続けていることが凄いなと思いました。東高に入学できて良かったなと思いました。この古き良き伝統と盛り上がりは、チーム79回生として残していかないといけないと思います」

私服登校を認めるか、いくつかの学校が検討を進めているそうです。「私服登校を認めた加古川東の学ぶ雰囲気は崩れていないですか」他校の校長先生から訊かれることもあります。皆、そのあたりを心配されているのですね。私は「今のところ、ウチは大丈夫かなと思っています」と答えるようにしています。

体育祭のあと、鉢巻きをしたまま下校する生徒を何人も見ました。「鉢巻きしたままだけど、いいの？」私がそう訊ねると皆「このまま帰りたいんです」と笑顔で返事をくれました。『自分はこのだけの体育祭ができるチームの一員だ』という誇り。これが本校の学ぶ雰囲気が壊れない1つの理由だと思っています。

加えて、先生方から、生徒から発せられる『人を思う言葉』が校内に溢れていることも本校の強みです。『前人未踏』で岡先生が服装について生徒に語りかけています。「我々教員は審判としてみんなを裁こうとしているのではなく、ルールとマナーについて共に考えていきたいと考えています。100周年という記念すべき年に入学した君たちはこれからの東高の校則の在り方の道筋を作る重要な役割も担っています」

『他校の制服はNG』それ以外の申し合わせ事項を作るべきか、職員会議で議論となった際に私は結論を預らせてもらいました。先生方お一人お一人の思いも伝えていただきました。まさしく今が岐路です。

それでも「その服装は…」と思われた際にも「それでいいと思う？」と生徒に敢えて訊ねていただき、ありがとうございます。先生方の思いは伝わっていると思っています。次回の全校集会では松下先生にマイクを持っていただきます。生徒指導部長としての東高先輩からのお言葉。私は期待しているのです。

「時間の流れは早いもので…」

県立加古川東高等学校長
新谷 浩一

○ ただの振り返りです

30歳を過ぎたあたりから私は校務分掌や異動について希望を出さない教員になりました。当時の校長先生から『何でもお任せくださいと言えるくらいの大かい人間になれ』そう言われた時、半ば反発心からそう決めました。結果として、初任校で3年勤めたあと、母校で11年、事務局で20年勤めました。

校務分掌はずっと担任でした。学級通信を始めたのは初任校の時です。学校からのプリントを保護者に渡さない生徒が大半でしたので、彼らの日常を面白おかしく、しかも少しだけ持ち上げて通信にしたら、持ち帰って保護者に見せてくれるかな、という実に不純な動機からのスタートでした。でも、実際はそれぞれが自分にとって都合の良いものだけを保護者に見せていたみたいで、まあ、成否は不明ですね。

母校では毎日通信を書くようになりました。調子に乗ってクラブ通信も週に1度は発行していました。働き方改革なんて言葉がない時代でしたから、部活動指導が終わった18時くらいからひたすら職員室横でパソコンを叩いていました。当時の私には生徒に伝えたいことが山ほどあったのです。

やがて教育委員会事務局で働くことになりました。何かを伝えたいと思う相手はいなくなりました。朝から晩まで仕事に追われ、ただ働きました。やがて高校教育課長を任せてもらえることとなりました。その時に気づいたのです。「ともに働く仲間達に伝え残さないといけなことが自分にはあるのでは」と。

近づくだけで鼓動が激しくなるくらい眩しい先輩方がいました。「これをオーラと呼ぶのか」そう知りました。一方、指導と称して言葉尻をとらえては理詰めで厳しく叱りつける先輩方に鍛えられもしました。その双方の影響をさんざん受けたにもかかわらず、気づけば私はどちらにも属さない先輩になっていました。武器がないのです。そこで始めたのが課長通信でした。「とりあえず言葉しか自分に残せるものはない」そう悟ったのです。毎週月曜の朝、通信を出すことにしました。2年で120枚ほどになりました。

さて、この3月、新たな内示をいただきました。加古川東高等学校長という私には恐れ多い内示です。職員名簿を確認します。会話したことがあるのは原田先生と上村事務長、久保田主査くらいでした。『はじめての校長職』を『はじめまして』から始まる方々に囲まれて務めるのです。たまたま不安でした。

その頃、校長通信を書くと言うことは考えてもいませんでした。そもそも書く必要があるとも思っていませんでした。ただ、私を送り出す高校教育課の課員達はさも当然といった顔をして私に話しかけてきました。「4月からは校長通信ですね。ちゃんと僕らにも送ってくださいよ」と。

実際に4月になって赴任してみると、ここには学校通信をはじめ多くの魅力的な通信が出されていました。「これなら出番はないな…」そう考えました。それでも暗中模索であった立ち上がりの2週間、多くの先生方、事務室の方々に支えられて何とか終わることができた時に気づいたのです。「ここで働く皆さんに感謝の気持ちを伝えることなら、私にでもできるのではないかな…」と。

校長室のドアを開けっぱなしにしておくと、困りごとを相談しに来てくださる先生方がおられます。戯言のような通信に触れ、「先生の通信、楽しみにしていますよ」そうしてくれる横山先生がおられます。父の死に触れた通信を出した翌日、富田先生はわざわざ朧月の思い出話をしに来てくれました。体育祭で一緒にリレーを走った直後に三谷先生は「楽しすぎました」そう笑いながら走り寄ってきてくれました。

学校長として期待されている役割を果たしているか、そのあたりは疑問符がつきますが、皆さんとの繋がりのおかげでここまで大過なく、しかも楽しみながら日々を過ごせています。ただただ感謝しています。



「伝えたいこと 伝わること」

県立加古川東高等学校長
新谷 浩一

○ 7月終わりの全校集会にて

何を話したらいいのか、直前まで考えがまとまりませんでした。自分自身を省みれば、制服を着ていた時も教員になってからも、きちんと訊いた覚えがない『校長先生の話』。そもそも体育館は人の話を聴くのに適している場所ではありません。「短時間にまとめないとな」それだけはずっと考えていました。

話す内容がまとまったのは前日です。ふと思い出したのです。前期の始業式のあと、吉川祐司先生に伝えられた言葉。「校長先生の話の最後は絶対に勉強の話やろ、とっていたんですよ。でも、校長先生は命の話をしましたよね。あれはよかったな」と。そうだよな、命だよな。そう思いついた時ようやく、性根を入れて挨拶原稿に手をつけることができました。

区切りの全校集会にあたり、皆さんにまずはお礼を言いたいと思います。誰1人、生命を落とすことなく今日を迎えてくれてありがとう。とても嬉しいです。始業式の日にお願ひしましたよね。「自分の生命と他人の生命を大切にしてください」と。本当に嬉しいです。ありがとうございます。

人はまっすぐに生きている限り、成長します。4月から4ヶ月が経とうとしています。毎日の学習活動、部活動に加えて、5月の文化部発表会、6月の体育祭のように1人きりでは叶えられないことを、みんなで協力してやり遂げてきた皆さんは、4ヶ月前の自分よりも一回り成長したのではないかなと思います。30秒間、時間をあげます。それぞれ自分の変わったところ、見つけてみてください。

ひとつふたつありましたか。あったら何よりです。私から見ている限り、皆さんは実に眩しい毎日を生きています。特に体育祭の皆さんの輝きは圧巻でした。3年生、凄かったですね。自分たちが精いっぱい取り組んでいたことは言うまでもなく、きちんと1、2年生を巻き込んで取り組んでいました。それが凄いのです。

始業式の日、私は皆さんに伝えました。「リーダーとして集団を動かそうとする際に必要なのは、人間的魅力ですよ」と。「この人とともにありたいと思わせる信頼感、安心感ですよ」と。実に魅力的でしたね。凄いな、心からそう思いました。まだまだ成長しそうで楽しみです。1、2年生はあの背中を目に焼き付けたことと思います。次は皆さんの番ですね。

さて、夏休みです。40日以上の日々をどのように使うか。私から2つだけお願いします。

ひとつは命を大切にすることです。つらいこともあるかもしれませんが、でも、まっすぐに生きてさえいれば、大人になっても楽しいことはいっぱいあります。皆さんには、是非、日々を楽しめる大人になれるよう、しっかりと生き抜いてほしいですね。

ふたつめ。できれば、この夏を「一皮むけた夏」にしてくれると嬉しいです。それは学習の面でももちろん、部活動でももちろん。

もちろん、人間的に「一皮むけた夏」であれば言うことありません。要は周りの人に「洗練されたな」、あるいは「逞しくなったな」と思われたら勝ちです。体育祭で『蛇の皮むき』をしましたね。あのときの生まれ変わるようなイメージです。うろこの下の層が成長をして、新しいうろここととなり、やがては表面の古いうろこをはがし落とす、そういうイメージです。



学習面や部活動の面で一皮むけるというのは想像しやすいですね。皆さんも友達を見て、「あいつ、ぐっと伸びたな」と感じる時がありますよね。あれです。おそらく本人は相当、努力をしたのだと思います。



では、人間的に一皮むけるにはどうしたらいいか、1つ簡単なと思える方法をお伝えします。それは出会う人、出会う人にしっかりと顔を見て挨拶することを心がけるのです。私は尊敬する先輩から、こんなことを教わりました。『人間なあ、挨拶が基本や。挨拶の姿勢が悪い人間は、その程度の中身でしかないって人から見られるんや。挨拶くらい格好良くシュッとやれ』と。

以来、しっかりと相手の顔を見て挨拶することを心がけています。すると不思議なことに周りの人が自分のことを何だか大切にしてくれているように思えてきます。すると、もっと不思議なことに、私もまわりの人のことを大切だと思えるようになっていきます。

その結果として周囲の人から「一皮むけた」とまで思われるかは不明ですが、周りの人のことを大切だと思えるようになると、見える世界が少し変わってきます。世界が美しく見えてきます。見える世界がほんの少しでも美しく変化すると、自分がどこにも売っていない、うろこを身にまとっているような気になります。新しい自分として生きているような気になります。

皆さんが一皮むけて、どんなにお金を積んでも買えない、どこにも売っていない、そんな非売品のうろこを身にまとい、美しい世界を生きてくれたら嬉しいな、そう思っています。まあ、これは単なる例え話に過ぎないですけどね。

それではお互いにいい夏を過ごして、9月にお会いしましょうということをお願いして、私からの言葉とさせていただきます。ご清聴、ありがとうございました。

○ 話を終えて…

蒸し暑い体育館、私がいちばん驚いたのは誰1人として自らを仰ごうとしなかったことです。ハンカチをただ流れる汗を拭くためだけに使っていました。手のひらでパタパタと顔を仰ぐ生徒さえいませんでした。文化部発表会を見て、体育祭を見て、あの全校集会の姿を見たら、やっぱり彼らを信じたくなります。

「服装の自由化ではありません。私服登校を可能とただけです」とはいえ、4月から先生方それぞれに様々なご意見をいただいてきた服装問題。全校生徒の前で松下先生がマイクを持たれました。

- ・「端正かつ簡素であることを旨とし、教育の場にふさわしいものを着用する」と、敢えて曖昧なルールにしている意味をそれぞれが考えてほしい。
- ・どんなに自分が正しいと思っても、ふさわしいかどうかの基準は人によって違うから、先生方に注意されるかもしれない。その時は先生方に思いを伝えて、しっかりと議論すればよい。
- ・自治創造の理念がしっかりと息づく、他にはない学校を君たちと先生方でともに築いていこう。

私は生徒の顔をずっと見ていました。誰も自分自身を仰ぐことなく、じっと聴き入っていました。松下先生の思いは届いていると私は思いました。続いて、この秋に清流会3万人の先輩方から寄贈される清流百周年記念館について吉川恭子先生がお話しをされました。

「これはこれまでの100年の歴史の中で加古川東高校に寄せられた信頼の証です。皆さんがその信頼を引き継いでいくんですよ」と。太陽はよりいっそう角度を高くして、体育館の中はさらに蒸し暑くなりました。それでも誰も自分自身を仰ぎません。その光景に私はひとり涙をこらえていました。

加古川東高校は、きっと大丈夫です。

